

## 歴史叙述の現在 —歴史のディスクォール—

### 0. はじめに

#### I 歴史とは何か

##### a 歴史はどんな役割を持っているのか

##### 1 歴史が権力的な言説として重要な役割を果たしているのはなぜか

##### ①「国民国家」によって担保される「歴史」

「国家」が先か「国民」が先か？

国民国家形成のための歴史／国民国家と戦争／戦争動員と民主主義

二度の世界大戦、冷戦終結後、歴史学や歴史教育は

科学性や客観性を標榜し、「国民国家」や「国民」とは距離を置く。

—「われわれ」「国民」の一体性を前提として語る一種の権力装置—

日本人とは何か…日本人は、日本人でないものではない。

国民育成のために生まれた歴史教育の基本的機能は、今日においても国民育成にある。それを否定して、「地球市民」を目標に掲げて国民国家や国民を否定して見せたりすることは、それを見えなくするだけにより危険である。なぜならば人権は国家権力の適切な行使と結びついて初めて実効性を持つからである。

##### ②「個人」にとって求められる「歴史」

「歴史」を必要とするその「主体」はどんな存在であろうか？

歴史 人間観としての「物語」

{ 自己の了解の方法としての物語  
世界の了解の方法としての物語

個人における歴史＝経験の個人の見方による認識・叙述＋忘却＋物語

人は物語によって自らを語り、自らの一貫性を保証する。その物語に根拠は不在であるが、物語は他者に承認されることによって保証される。世界に対しても、その複雑さを物語として単純化して理解している。

## b ポストモダン以前の歴史叙述はどんな手法だったのか

### 1 再構築論

エルトン「過去を客観的な事実として認識することができる」

### 2 構築論

E・H・カー「歴史認識や叙述における現在的な視点の意味を重視する」

**近代の歴史学は「実証主義」「科学主義」を軸にして作り上げてきた。**

実証主義 経験的事実のみを知識の唯一の源泉として認め、感覚的経験によって  
実証できない知識を無意味な物として退ける立場。

## c ポストモダン以後の歴史学の展望

### 1 ポストモダンからの批判

**歴史は進歩していく…のか？**

#### ①ソシュールからの「問い」

そもそも言語は実態を反映しているか？

「記された物としての歴史は、

実在した過去に本当に対応しているのか？」

…歴史の根拠として存在した観念への疑い

#### ②デリダからの「視点」

「西欧の存在論もしくは形而上学の基礎概念が

作り上げた構造ないしは建造物を解体し再構築する」

### 2 歴史の脱構築論

近代的な歴史学を、実証主義・科学主義を軸にして作り上げてきているとして批判し、現在歴史として構築されている物を、構築している様々な要素に遡りながら、批判的に解読する。

### 3 歴史の物語り論

あらゆる歴史は、「叙述される」という形式を持つことによって、常に物語という形式をとる。本来的に過去実在とは同一の物ではあり得ない。

### 4 歴史修正主義／自由主義史観

歴史の物語り論を援用し、「来歴」として歴史モデルに、特定のイデオロギーに沿って独自の修正を加える思想・歴史観。

## d 現在の歴史叙述はいかにポストモダンからの批判に responding しているのか

### 1 オーラルヒストリーという手法

### 2 証言をどう読むか

### 3 辺境から見た歴史

## I・結論 歴史とは現代において何か

—だれの、なんのための歴史なのか?—

### 国にとって

その集団の内部の連続性を根拠づける物。国民国家の存立を担保するのは国民国家の内部の一体感、共同体の記憶の共有しかなかった。つまり、共同体の構成員に構成員としての意識を持たせるために歴史教育はなされたのである。このときに意識されるのは共同体の外への差異であり、また、そのことを通して自己を再確認する。

境界線とは、「Aは否Aではない」として定義される。

### 私にとって

それは本来、「思想、国籍、年代、宗教、…」など、その人が生きてきた個人的な経験や、その人自身のパーソナリティに左右されて当然の物。そして、必要な物。また、体は常にどこかの土の上に立っているのです、関わらざるを得ない物。

### まとめ

ただ一つの真実の歴史、それに伴うただ一つの歴史認識があるとすれば、幻想である。そして、そこには「誰か」の「意図」が常に絶対に存在する。歴史が「誰かのための歴史」に過ぎないということ把握し、私たちはそれを見極めなければならない。そして、いかにそれぞれの様々な歴史とつきあっていくのかをここからは考えて行かなくてはならない。

## Ⅱ 歴史は、いかにして「認められたい」という欲求に応えるか

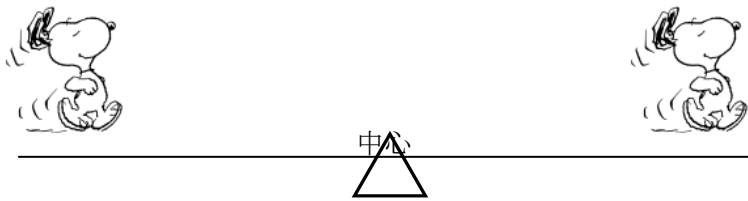
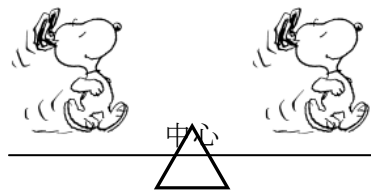


図 2



(別の変動範囲)

### 参考文献

- 『歴史認識を乗り越える』小倉紀蔵著 講談社現代新書 2005  
『歴史を考えなおす』k・ジェンキンス著 法政大学出版局 2005  
『人が歴史と関わる力』安達一紀著 教育資料出版会 2000  
『史料学入門』東京大学教養学部歴史学協会編 岩波テキストブックス 2006  
『歴史学の現在』福井憲彦著 放送大学教材 2001  
『物語の哲学』野家啓一著 岩波現代文庫 2005  
『歴史叙述の現在』森明子編 人文書院 2002  
『差異の政治学』上野千鶴子著 岩波書店 2002  
『ナショナリズムと「慰安婦」問題』  
日本の戦争責任資料センター編 青木書店 1998  
『世界』 「「従軍慰安婦」問題と歴史家の仕事」安丸良男著 1998  
『思想』 「歴史思想・歴史叙述における言語論的展開」  
ゲオルク・G・イッガース著 1994  
『オーラル・ヒストリー』御厨貴著 中公新書 2002  
『現代政治学』加茂利男編 有斐閣アルマ 1998  
『世界』 「主権国家にとってナショナル・アイデンティティとはなにか」  
井上達夫 1996/6  
『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』B・アンダーソン  
NHK出版 1991